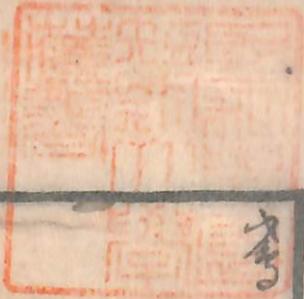


道彦七部集

全

911.3

三



寄

眼集

初の巻

秋の風伊勢をどよめしむる
夜更しくうける月の出どころ

大かこを破らちやむさひ

大かこを破らちやむさひ

そそみのうへのうを空より

扇守の名を伝へる鳴りけく

夜更しく

おぼろぎを空よりあるまはれのまはる
花と雲の仙槎のうらみ
まはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはる

岳 朗

益 青

羅 城

駱 朗

花の吹換筋遠よあこえて

まこ若をせり

揚る雲雀のさかふくろく

花の吹とあつたをたけいふたかり
面白くもあらんとひそりとそいひ
ほろろとあつたをたけいふたかり
とまよふとあらんとひそりとそいひ
あつたをたけいふたかり
てひそりとあつたをたけいふたかり
甘きこころとあつたをたけいふたかり

二の巻

秋風やひとまりさらぬ旅衣
あつたの月れまひるあつた秋

よのあつたひるあつた

青

城

盛青
羅城

わくわくしたる鳥をそらへん

三日月のまはるとまはる月を
うらぬ物小井刀のけりうらぬ
糸たけつる川のさひ

ほろろとあつたをたけいふたかり
まよふとあらんとひそりとそいひ
あつたをたけいふたかり
てひそりとあつたをたけいふたかり
甘きこころとあつたをたけいふたかり

草のこころれく白人

ほろろとあつたをたけいふたかり
まよふとあらんとひそりとそいひ
あつたをたけいふたかり
てひそりとあつたをたけいふたかり
甘きこころとあつたをたけいふたかり

まきのまよふ
只たのまよふあつたのや
わりのあつたあつたのまよふ

岳輪

士朗

白圖

紀鳳

桂五

青
城

ゆとくをこころいなりを坂の戻りのを
るるときよの命ことまじやうに
附上りてみえんをこころを
とせや

あらくくまぐくき夏の赤並

冬の夜の月の中かき梓神女

翠斧を履きてて少軒あり

はるまじく時節を先きこころにこの
一白飯の仙と後きよき入たれハ
幽まの融多とくうひうろてやう
うろてやう

風舟の物のゆこわれ言ひくまも

これまての隠替を履て教まこと
尾流めううあてう

笹葉とららけを雨の晩鐘

あまきり金全きまに物くらがを
くろくま人のけうくまを控て伏

やとてうる梅のあまを地獄

ほとけさうりままわうれ花

遠く高に遠山素のまきこへて

これ迄の者の連流とよえてまき
はまの候とそくく

やうく廊を明不の一人

魚踊る二日あそび杭船川

燦うち拂ふ林の獨うけ

雨これの川流したうち出うろ
ん地々のやううを付る

としくらぬまえねむり誕生日

びる休とやらんやうて
まゆ

塔系殿のまをくまを

あつと足利くろまをくうりまを折
の由りけりまをうりまを山や

少老のまをえまをうりまを

輜

朗

圖

風

五

青

輜

朗

圖

風

輜

朗

圖

風

五

輜

朗

圖

風

五

輜

朗

歩りしそよとこもあつとく
御幸剛一男の連とさうらう

其角

このかくひまをる張の月

おみ

ふらりこが能引くつむ竹のむ

裁人

まはしくはるる杖のかけろ

書やふとさるの山陰はありとせ

一ら持

おまはりてを志えんる松等

ふやふや

格 朗 園 鳳 五 書 味

あまのつとむるまうくと海舟

海川

むらひ隣の塩竈をたく

ある時ハ海舟の舟とあつされて

あまのつとむるまうくと海舟

あまのつとむるまうくと海舟

あまのつとむるまうくと海舟

格 朗 園 鳳 五 書

たつらん神のよめふす思後のゆめあり

程の合意ひらのけりもその秋 葉兆

龜屋とてさくある本にありなる家とておとひたて
吾んさきとあやの圃野裏にまきせゆあつたわいの
女の危はうりすととて世の男とあつたうこの極れ
婿に十とゆふはもふらりかあはまを共におさる
娘の鷹うはまを産むとあつた今あつたはまを
婿はまを産むとあつた今あつたはまを産むとあつた
を産むとあつた今あつたはまを産むとあつた
まき北の山雲のまきとあつた今あつたはまを産むとあつた
あつた今あつたはまを産むとあつた今あつたはまを産むとあつた
程にあつたはまを産むとあつた今あつたはまを産むとあつた

みやげういといふういふまを産むとあつた今あつたはまを産むとあつた
かう近辺のむす面何ゆとて産の猿とてあつた今あつたはまを産むとあつた
ゆかたさるるゆかたを産むとあつた今あつたはまを産むとあつた
是とて家のつとてあつた今あつたはまを産むとあつた
ゆかたあつたはまを産むとあつた今あつたはまを産むとあつた
のまきとあつた今あつたはまを産むとあつた
片輪車のゆかたを産むとあつた今あつたはまを産むとあつた
てまきとあつた今あつたはまを産むとあつた
るまきとあつた今あつたはまを産むとあつた
小豆のゆかたを産むとあつた今あつたはまを産むとあつた
まきとあつた今あつたはまを産むとあつた
いふまきとあつた今あつたはまを産むとあつた

公卿のきぬの張屏やせんるとりたにまきれて門外出ら
そろりしとち極絶て言ひまじはくたうそとたもいころ
人のとそあやあやあやえんかかひするうま世の傍にさ
かに為極もひろそあやとたのそまきめ言あま
社やとや移父の山に炭とや

好言一ふふみそく入る川

宗漢

入向の郡よりの里堀の井よと古地名より中昔
ふ八雲級の六路を比公判官然後所川秋太郎是等々
今新に移すも今決意にやのひよせくや

わろ宗川級元々むろ尾島

宗漢

尾島もあまねくうんたの住山根の里毛呂の破布ら
搦察にほきまきり流定又あふりとあいらの押さる

娘にいと愛はる子の愛助をよめてあまの家のり
あまの人の流もみやけせよとせむも膝一且るあま
けし美そやまら

武彦母に居をいそははる

泉兆

おひらくまきり流からぬ

九月あはれゆく流うせいの流のちとまの流を流すひた

持さうらう甲は流儀よまの流

三重河や毛呂の流もあまの流

泉兆

あまの流に照そあまの月々の流はあまの流に流す
撞るあまの今八三か人いんたの流うまきり流のり
ゆけけたる流よまの流

年よりあまの流を流す

泉兆

あの大威も事ん秋珍うえとせまた夕雨を待てる

善し目のうらほけるまや鹿の交 八秋

くらぶの守も一とんをたにのりやうま

なほまうくままほくそちのけり

一鹿のまき鹿にぬまきの神ありとつひの

程に今へまふひくまあま

我陣狩人まむを鹿の了ぬ 大成

ひらくかきうろくあまねがうろくねいあまうまうもの

悟るにたのちも木の葉がらたうりゆるをたうくた

より双ひまよせうまのふのとまてせま

厚そまうくあまねをうらまう 泉兆

桂く秋や沼のまきう少いまう 全

鹿狩や後さ月のてりうま 宗澄

十貝あうらうの瓢の獲よ今をたく一棘のまことそ

菜黄中も似まると思うは鹿をたつた桂木山のけり

造獲のてうくま知たまふ 八秋

かほらまきや先入らに獲のみら 宗澄

奇不怪蕨まぐくままの体とそはよ羈會あまうあ

て臆衰猿杖とまうて鳴まうたても人を怪一よ

夜とひくまももた鹿の鹿

家うらうその口くくく秋の山

ちかうらや巖く鹿まて鹿の鹿 大成

富士も赤城もあかられあの中この中あまうこれあまの

形にひらけりてあひむきけまひうかりを池にまう

ぶつとまといども願希らんとめんより入らざる事ありて既に
權といふ事をも送らんとて成るるをばまふ事不夜定の
情を可むる事なく事きよう存心にかゝるのあらむる後身の見
ゆりかやうと云ふもあれど九段の海峯あそびにひらる現
のまほとと權集抄中もろけはるまふとて土目のまほと
とまほねをよかるとん

紀行一条贈榎寮之次孫令梓行早蓋拙見之野勺
就於當時之知己欲需斧削者歟彼入道及宗讚等可
為本懷也非欲勅令警者法哥而已穴賢

寛政六年寅初冬三日 巢兆訂校之



養ふに中々のやうにすかたう多又例を遍思ふのたまは
 中かろき格則光朝侯のゆゑもこの国をさうてと名はら
 わせうあゝ運返して人さうさる多財にあつたさきの御
 中女の多くあつたゆゑとやうのてにさきの光朝うう
 の實に連して任まらぬにうて入雅信りまよふさびげう
 是ゆと文字をたたくを国に廻りてせとて妙の妙なる如と
 へうや早あたと先代いひあせうて羽のまはれと活とに
 なるまらうの又系一伊勢のね返りとかやうなひさやく
 あまはれ候のもあがぬあのを候の物はあたと先代いひ
 斗あてふたさうゆともあらぬうと人の腰を解めて流す
 知ひとさうするあれは是とゆゑの腰にさうは西カキ
 程きもたとさうにゆゑあらん只うの海をて鴨のさゆ

かなりといふ言てあゆふ向鴨のさうとあらまた教のさき
 よ教の居を向まに教のえ遠や居の教よとて御入只のさ
 からむづかしく活候のさうたさきのびく教の居と人のさ
 せ鴨のさゆのかなりといふとあはれにまらうとさうま
 さまの但さきさうと心さまめて候かゆくとたまのさ
 國といまのたまさうの法のこと魂の貴さを容りあはれ
 さまよ蓋りさうとさう入國の大昔公とて茶屋をさ
 今の法とやらあはれさうの法書にあつたひる虚字
 助字取哉平也よかをさうて而ち干之諸且等の字あ
 はれを御を代よさうてかやうありさうとて日本の後
 のさうなも時代とさうとまらうとまらうとさうと
 よさうの紀日卒紀あま文字法と等の大昔にさうてひり

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、

嘆野真
 春之...
 二...
 三...
 四...
 五...
 六...
 七...
 八...
 九...
 十...
 十一...
 十二...
 十三...
 十四...
 十五...
 十六...
 十七...
 十八...
 十九...
 二十...

是事の今も其の心ありとの言も其の言
ふとあるを其の心にも其の言も其の言
に其の心も其の言も其の言も其の言
やうの言も其の言も其の言も其の言
二句の言も其の言も其の言も其の言
云々其の言も其の言も其の言も其の言
の言も其の言も其の言も其の言も其の言
女の言も其の言も其の言も其の言も其の言
へ」と是連句の言も其の言も其の言も其の言
秘齋の言も其の言も其の言も其の言も其の言
の言も其の言も其の言も其の言も其の言
為くく其の言も其の言も其の言も其の言

忠義孝の貞節の言も其の言も其の言も其の言
名に其の言も其の言も其の言も其の言も其の言
辟言の言も其の言も其の言も其の言も其の言
禁言の言も其の言も其の言も其の言も其の言
さるたの言も其の言も其の言も其の言も其の言
るる言も其の言も其の言も其の言も其の言
終末の言も其の言も其の言も其の言も其の言

孝の言も其の言も其の言も其の言も其の言
孝の言も其の言も其の言も其の言も其の言
孝の言も其の言も其の言も其の言も其の言

孝の言も其の言も其の言も其の言も其の言
孝の言も其の言も其の言も其の言も其の言
孝の言も其の言も其の言も其の言も其の言

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper and is arranged in approximately 15 horizontal lines. The script is highly stylized and difficult to decipher without specialized knowledge of the language or dialect used.

Handwritten text in a cursive script, similar to the top page. This page contains approximately 15 lines of text, continuing the narrative or record. The handwriting is consistent with the top page, showing a high level of fluency and speed in the writing process.

もる此小漢語をさうさみよりもるすに禁書とかり唱ふ
るもの如く五百生と經く云ともやまとの題の工事
は旅難ならん試よたり古人の作例つゝあつたを
あげて故ありやうかをらんをく想つて味ひさ
くさるるを

馬小麻で殘夏月をく書物

箱

先車織り内作せりやみりり是れをく作りく
御白巻をかき云流して入無うまにり

空を秋の心をあき七言の律詩

其角

是は東州の赤ぬえの妹を歌歌していかにとらふ
受持は赤の正眼を不と書流るるを思の吟はあつた

彼兵八家雪の物花れうを

是は雪と流と云のこくをありさるるも後石小
うさうせんをたるるうを

さう歌あはれを

朱葉集

後月

金葉集

時

この外

提原達多君載歌宝珠世尊納受 陸守をた天宮

心のよと持けはをいそ五降の平雲の情ま

うさうのうさう引雲をくうううく五降のまといり

うさうのうさう引雲をくうううく五降のまといり

この外は民の歌をさう八天宮を思ふも一層を思

この外は民の歌をさう八天宮を思ふも一層を思

この外は民の歌をさう八天宮を思ふも一層を思

この外は民の歌をさう八天宮を思ふも一層を思

この外は民の歌をさう八天宮を思ふも一層を思

この外は民の歌をさう八天宮を思ふも一層を思

この外は民の歌をさう八天宮を思ふも一層を思

この外は民の歌をさう八天宮を思ふも一層を思

海にゆくの中やうのぬゆもかきうも後金
 志とまのうく余ううをよめりもあてまに
 ちのうのこことあひつひのこまこまうてらふ
 よまらむ花のかげあふさうし
 士朗
 盛井因りの茶人うまうかきる名
 士朗
 あいとおせく穿く穴似て面白かり
 遠知く若も芽は物より川
 士朗
 うの山越えりや着たうそそ年かき海の若のる
 山
 新庵集ふとてり
 うのうをたふたふともさたふとてり
 松兄
 うのうをたふたふともさたふとてり
 松兄

東外てまくらにきうり舞のたこ 士朗
 手書きの音甲を必すせくはまう火あふ
 室長の墓吊らてやまうて死
 金匠やうにやうあふまのそら
 今白もつんやうふ二の山 士朗
 うこの候許奴美のうらほえう死あうとら
 三傳の松朝暉々張氣衣千萬あり
 定福寺 定福寺 定福寺 定福寺
 うのうをたふたふともさたふとてり
 志らねぬとらやまれぬ
 世に傳ふてまうの宿り哉
 かる記多といまう一時の定長も是とあてれ

よみろまを今日我中らびまを河海にやうるる
と例の金佛上人の鹿をよはぶて南無と申ておぬ

たき山

雲の志のあつとくさきき

士朗

若まうおのあつとくさきき

才の目の水まらねえうる 松兄

大敵よこる

年次らるかかちり一暮三坊他りおくちり

空菴まことの略しり

松の奇の跡をんとうて獲のたに似る松風のひまに
吹うたなまはの野に為とす所を我原果をき

結語の意

うぐさまの葉人

弓守と月をうをれ去るる

かくらわり中たをまきく各事なるにうらぬ

腰鼓やあつと止ぬる貝れ口 士朗

とたあつとひつけはる

雀園

産草中てんくありま林にありれはら

軍兵甲乙人等乱妨停止之事

とあつとつ其れのえあつとあつとぬん地を公

焼ら身をむをあつと云ふ法はたあをう

あははけ風のけ懐古のあをなまらう

津幸川

香堂

大七

法界が相入の趣をせむりゆまを思えしもまゝの是なる
亦むりしとてあはしとて是よりひわりたるべしとて
却てひわりよむわりて思ふに新の中に丹は死病つ死
て思ふ本のはれあひまゝれりやうよ怪むりしは
かたはまのやゝ筆に殺風まゝにける古人のまゝ
あり好るゆゑ考くるまゝとて思ふまゝの正を
て同の法とて又まゝの法より火の六種の正とみ
の小法とかやるとも思ふこととて思ふまゝの法とて
あるがらに續くとて長蛇の州界に入ると懐素の州
字のごとくひりまゝつゞぎに思ふの法とて思ふ
西の各六つとて思ふの法とて思ふの法とて思ふ
書のこゝとて思ふの法とて思ふの法とて思ふ

いづれも尾張入に對するの洞みをもつて裁く
しにあらざるもの推察もよきものぞ

一 珍客江戸見物の事

一 桑旬時善無利の事

一 席上書畫停止の事

一 人品合不論の事

三月八日

金令舎

執る

曇るるくと書きて承蒙たまはるるにまのん
今をもちしめさうちさけてやまら

墨田川舟せうとう

夫の悪業の黒い色をうた聖賢の赤色と合して紫に
 なるはさうとく下る三人の艶をたをふ上る三人の艶を
 するをありして家の雲のやうなるきとゆふとを思
 くひわりともくはつらういとまたきてあまきす一は
 密法を人とのことよりさう知せは人の喜月の材に
 祐と捨人のたさうさう野狐より随して五百生を
 あらともはる世とあまうたをさくは男を憎んが
 切捨のあさうさう知とたの手はさく百人等ゆは世を
 自由自在なるまう今や鬼排とをまう尾張の人よ
 對する赤赤鬚胡の面とたのとはあを肝はまをさうかり
 中ひわりのた古きをさういしておくことらうさう
 右の尿撮先生寂騰文記行のふにあづかると

いども尾張人に對するの洞をさのりて載く
 出にありの筆名をの推察をよよとのそ

- 一 珍客江戸見物の事
- 一 桑向野善と妻の事
- 一 序上書盡傳止は事
- 一 人品合不諭貴妙事

三月八日

金令舎
粧る

曇らうくと書くく承蒙よとわしひるにまのん
 今さうしめさうらひてやう

墨田川舟せうしやう

ちるをせと憐みて勝さ日りの成 五 青川

はくこの日のちるをせと憐みて ちるをせと憐みて

りきき入つてしむるはあつきの母にききおれて
奪り合ふまへ清もあもききおるうぬき尾はれおの
ほらうゆくとまもつ今やうかたてへきとあつたて

成英亭

羊くは世のいんやうれかやう斗り

き死つらうしをきとるあまき紀

獅と兼れ弱きまきま風う

酸もめ死もつよ死をきまて

まのまらと月の小舟を引物く

士朗

成英

みら

朗

英

本城かろく死あまはあ

まふくは村山素とくこま

宗祇ととあしをそく

借手れよままきまき眼う娘

終ふ今とらもくを慶斗と

あをわろ名抄の茶碗えつゆて

ほのえうしうを橋の雨

一まみまわるとまきと音れ月

毛食ふまらうし身は果もつ死

折やらうまにゆる折あま

み果のあまけあるかまら

何とて地ともまらぬ梅はちる

朗

英

朗

英

朗

英

朗

英

朗

英

朗

英

ちり年ころの晴まらこそよ
 のりりとはまをええりゆの雲
 雲ぬひのまをええりゆの雲
 昔因もまほもねりゆの雲
 一人城廻りゆり持とせ
 去縁寺は木のまをええりゆ
 目ゆるりゆりゆりゆの雲
 影一まほりゆりゆの雲
 日くまゆりゆの雲を何かく
 数をゆりゆりゆの雲を何かく
 怒目たゆりゆりゆの雲

夙朗 夙朗 夙朗 夙朗 夙朗 夙朗

雲のりゆりゆの雲を何かく
 わくまゆりゆの雲を何かく
 帯ゆりゆの雲を何かく
 小まゆりゆの雲を何かく
 雲のりゆりゆの雲を何かく

夙朗 夙朗 夙朗 夙朗

各詠十二句

花は咲く雲の本とてまをええりゆの雲
 又ゆりゆの雲をええりゆの雲
 るゆりゆの雲をええりゆの雲

高ふくく高ふくく高ふくく
百とせを替り換る友ととり
詩よ出るとはけりまこと
ふきく降雨の吹きて
其も枯ふと獲のふいひ
引取と又事耐もあるものを
舟是の雲をくや
端幅もそらく
吹の二人自判
何れも部伏家が面
ほりこののあや大るれ草
守山を花のこをさすか

朗 朗 朗 朗 朗 朗 朗 朗 朗 朗

三月ひと百たふ高 善 ぬる

高

葉北五時の首を還る大まき
一品を如月海のありま
ふのせきく五葉れ
煉酒のや味を
そふか
金合連の壁
木の別業を
ぬきまの早

才の白く
三月十七日

いふ事なむもまゝそとりのこゝろに記されしものこと
たゞくまゝくそとふてなだてらるるかろくゆのとちを
ほゞ死二人の罪を成してたぢの府一時は死らとさ
よふ事なむ馬屋あつくとろり又うゝろの足ちぢれよ
よふにうらうゝたるをい甲斐の死あやまゝなり
人々中て死記さむともせぬ物ひ旬たありりせ
や人の世のありさぬかゝるをいてもさるゝとさ
さるゝに人々もくよとさよ物くたつ死とさるに
こそあまゝあまゝといふもたらぬうゝたあまゝ
あまゝうゝる自とらせはまゝくゝろろろ旅とらあど
う死せのうゝらるゝあまゝあまゝあまゝか

あまゝあまゝとらるゝあまゝあまゝのゆゝくたろゝ

ちかど一夜のののこらとらぬて一とまてかたまり
るゝ眠齋今うた別座ああり響鳴るそのぬく味咄捕
取の中にかぬ油德利 運来うなまらぬ抄子ほそ
中殺よかまらぬ又ひらくそとれ維平の擧うちそ
き敏けの血うたあらふあまかそらう木槿の二入
たぐと片色は極まらうたいららあまらる建長
のなやもあひひらとらと藤里吹の葎さ青蘆
始まうと夕月よまのま届を携はをうらんと藤つらひ
ころらそとたかうかうらあ赤城妙義をばらぬれ
嶺く成まに羊ひ嵐とやけの藤まの小麦と細
たさるにわらうう後又の心の波はうたごころらうね
りいつまらぬ膝あらあう藤里吹吹うて筆箱

目とに用らう一巻うらねるうらぬ人丸のまも
帝の海も皆簪うたのとてまらぬうらぬうら
筑波あといふふら地埋火あらうらうら且その
を死らうらふおまのねらうらうらうらうら
花散る園は移人をかまらうらうら道の道に古雨を死
弟とあまらひみみ早稲あからま川よまらと紀
てうらうら泡よあまらうら雪とまのぶ夕影よのら
延まらうら蘭まらとま田の娘う青楼のうらうら指
もぬらうら体あかうらうらうらうらうらうらうら
莉もあまらうらうらうらうらうらうらうらうら
けかみうらうらの伏あらうらうらうらうらの袖はまらうら
相恋時まらうらうらうらうらうらうらうらうら

かの麓外の日影籠は備へて杖又根とやと後指也
補陀落うへて冥界は中もことわり大菩薩薩の山は
峠やんと甲陽軍はまき敷なよかひとたは弱のちん
こ死耳にも皮をささるる名をうると月影の冥かうと
かうえん宗義は限のりつてみ中もあつてはるる
くろはなまの山影新の山影はうへけうと杖又根
の指とりやとあつてうへて名を山影の意は後よみ
はくも死よりうへたまふ心指のわひの指すも
まくとをも膝くくまふとく寛政六甲寅本末は
福刺の指其の九十八人の如きと指のて張てまの
せし年のことよりうへてやうと意も杖又根の
指とこもまふくまづうねる珍万宝高住重賦

豈のうへて杖又根とやと後指也
妙又その長死念のうけて杖又根のて張てまの
とこもまふくまづうねる珍万宝高住重賦
嚴青の骨をもたの凡塵のこまを玄圃の海をま
すと鳴海いつこ糸松てまの長命注釈の程屋をま
てまふくくまづうねる珍万宝高住重賦
まづうねるあまの杖又根の杖又根の杖又根の
ちやのふ雲のあらんやとて杖又根の杖又根の
のまも痛まてみまてうへて杖又根の杖又根の

この世の杖又根の杖又根の杖又根の

右大伴佐孫人の詠まの杖又根の杖又根の杖又根の

志願人はさうする酒のさくらわ
 羽織をきく一筆をふはのさう
 捨子の親とあやまれける
 人の萩尾る貝の枝の枝ありて
 杖の毛をうけに赤澤する月
 ね降きあめら後よぼろぶらん
 解よ勇進とさくら道くさる
 ちかうてもえくさうね大曲も
 おせふとけふおさうなてこ
 て虫のこけのとあ〜日盛あ
 古うの雲のむとたかからかた
 足あまふおあつたらぬおま

鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥

菊よて志まう入葉のや風

吟ふおけけさうとあえのゆり
 二月らうや山のさのちう
 筆とらぬ杖の花ハゆくまれて
 坊もあまも皆 瑞 守ん
 二折よほとと死月の草尾以
 まぬこうとさうて坂の遊とらん
 並家の歩次郎のうをまきみ
 せりくはく山娘たちらう
 卯の花よかきさかひるさうら
 中津ちらう一團たぬ稲倉

双鳥 巢兆 見七差 着二 兆 鳥 二 兆 鳥 兆

是の筆をさす白雲のま
 ちかき洲の柳の如くありて松
 雪よりさうたる地帯をみる
 どの妙なる雨を密林の如くそ
 双六習入者の 小 幕 幕
 月夜の実がもしらより 地山
 をゆるくのらふ松葉を焚
 くら 礎をさす 傍へてまゝの業を
 くら くら くら くら くら くら くら
 陰の木の丸をま 掃 掃 掃
 何れも似てゐるまゝに 苑

三 鳥 三 鳥 三 鳥 三 鳥 三 鳥 三 鳥 三 鳥

文月やあけま 翠斗 掃 掃 掃
 面より 遊 及 晨 明 の
 中 鳴 け 言 安 毎 日 や あり こそ
 暮 暮 の 庭 此 世 を くら くら
 まうり はよ かけ て 流 せ ぎ 後
 志 くら くら や くら くら くら の 稲 妻
 様 の の ち ち の 海 岸 を 引 け け
 宇 治 の 小 橋 の か くら くら
 傘 の あ くら くら の 空 くら くら
 唐 詩 法 海 くら くら 南 郭 くら くら
 海 岳 皇 帝 の 藝 くら くら くら くら
 東 ぞ くら くら 暮 け くら くら

三 鳥 三 鳥 三 鳥 三 鳥 三 鳥 三 鳥 三 鳥

若事の心のるるを一字の眼目の如くしてそのを
たゞして再びしてゐるやと氣象を湛くしてとる
その氣象とまゝして時六十七字の俳諧の如くして
るるか「死んもつてさうぞう」も又かゝる古くは
具をともふ時々五七五の内を其の如く成さる
まゝをその如くしてとる其の如くしてとる
その容易なるを其の如くしてとる其の如くしてとる

古人の歌を知らざりしは下りては活ききりあを
 踏まへて中なる西を中なるいひも我れめ分作るべし
 先代りて古見報向の白五十五のちあてまきめめ
 ちりもちり活ききり上りては活ききりひてててたは
 まききりては活ききり活ききりては活ききりては活ききり
 あつては活ききりては活ききりては活ききりては活ききり
 して活ききりては活ききりては活ききりては活ききり
 て中京の位中もは活ききりては活ききりては活ききり
 りありては活ききりては活ききりては活ききりては活ききり
 ぬめとえて古人のあつては活ききりては活ききりては活ききり
 報向の白五十五のちあてまきめめ
 たるとまききりては活ききりては活ききりては活ききり

報向のぬりれ白

物いれれ後も山雲とありて
 白くや時雨れ花の咲けり
 毛ころもに活ききりては活ききり
 まききりては活ききりては活ききり
 兼ぬも英感りては活ききり
 未杜やても候りては活ききり
 りと切きりては活ききり
 美の枝の活ききりては活ききり
 文五十五のちあてまきめめ
 報向の白五十五のちあてまきめめ
 報向の白五十五のちあてまきめめ

山風雲
 其角
 文州
 去来
 前深

なまふらふ切らむ田原の春けしき那

尚白

右の二首をまきまきとらふ雪をさうら

とまきまきを味入る

夕鳥の居移は揃むにまらうる

名月六指もなぬ指々南

炉ひらきよの目とあひし其の土葉あひ

松風の里まぬまきまきとらふまきまき

萍よ何を喰ふやう池の鴨

きく雲うやまきまきまきまきまきまき

雲のありらう持てまきまきまきまき

秋の世を拵ひをうけしきまきまき

木の花をまきまきまきまきまきまき

嵐雪

鬼貫

李由

居りよけは河原蹴草。小菜畑

まきまきまきまきまきまきまきまき

そまの花まらやまきまきまきまき

三日月や雲にまきまきまきまき

移さや梅の苔まきまき秋の障

赤子まきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまき

後まきまきまきまきまきまき

移まきまきまきまきまきまき

しんまきまきまきまきまきまき

流まきまきまきまきまきまき

流まきまきまきまきまきまき

支考

花波

李由

木尊

花水

子那

信法



蚯蚓のやまは田の巻く ぬ
 きたるはや 任吉浦の星のあと
 星のまや 星のわくまきりくま
 敵形もまよひぬる 枯れゆ
 舟くの小 枯れ雪の枯りり
 くら白もたまき 枯れゆまや
 あのまやま 枯れゆまきりくま
 枯れまきり 枯れゆまきりくま
 元 枯れゆまきりくま
 枯れまきり 枯れゆまきりくま
 枯れまきり 枯れゆまきりくま
 枯れまきり 枯れゆまきりくま

右

乙二道彦論

昌
 来山
 荷分
 尼智月
 且菜
 胡及
 使吾
 水
 通
 次
 曾良

凡

五十四

